

山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 第六号 別刷

平成二十一年八月

山形における〈花咲か爺〉の話型

―昔話「赤いこん箱(屁ひり爺)」が提起する問題―

菊地 仁

山形における〈花咲か爺〉の話型

―昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」が提起する問題―

菊地 仁

(文化システム専攻アジア文化領域担当)

序

昔話〈花咲か爺〉については、柳田国男以来、話型的には〈雁取り爺〉が先行し観音信仰の普及とともに枯木に花を咲かせる後半へ交替してきたこと、中国には「狗耕田」と呼ばれる兄弟葛藤の形を取るものの〈花咲か爺〉に酷似する民間説話が存在すること、など、基本的な問題点がすでに洗い出されている(『日本昔話事典』『昔話伝説小事典』など)。なかでも、東北地方に関しては、この〈花咲か爺〉を「犬こむかし」「くいこむかし」などと呼び、後半の「花」(〈雁取り爺〉ならば「雁」よりも、モチーフとしては前半の「犬」に焦点化していることが、しばしば当該話型の本質に関わるものと着目されてきた。

今回、本論のひとつの軸として取りあげる昔話「赤いこん箱(屁ひり爺)」は、結末を「花」でも「雁」でもなく「屁」(オナラ)による致富とする点で、ほかに類例を見ないきわめて珍しい報告記録である。残念ながら直接的な比較材料がないので、この採話例が話者(語り手・伝承者)による記憶の混乱や言い間違いに基づく一回的なまいったくの偶発事だ、と解釈できなくもない。しかし、かりにそのような例外的な逸脱であったとしても、そうした語りを陰に誘発したものは、背後に拡がる話型〈屁ひり爺〉の存在に大きな要因がある、と思惟される。結局、本稿で問題としたいのは、個々の語りの現われ方ではなく、その奥から

操作してくる口頭伝承の話型ということになる。

以下、この特異な昔話「赤いこん箱(屁ひり爺)」を起点としながら、全国でもトップクラスの〈花咲か爺〉採録数を誇る山形県の昔話について考察を加える。その特質の解明にあたっては、話型〈屁ひり爺〉のみならず、中世のお伽草子・近世の草双紙や中国・韓国の民間説話なども考慮しながら、できるだけ多面的な分析を試みてゆく。

なお、本稿での昔話の扱いについては、◇で口頭伝承としての話型を、「」で具体的な個々の話に付された題名を、それぞれ指す。また後者に関しては、話者(語り手)が特定できる第一次資料を主たる考察対象とした。ちなみに、『』は単行本などの書名である。

第一節 昔話「赤いこん箱(屁ひり爺)」の全容

ここで取りあげる「赤いこん箱(屁ひり爺)」(話者…江口ヨシノ)とは、次のような昔話である。少し長くなるが、まずはともあれ全文を引用してみる(『せんとく金の江口ヨシノとんと昔七十二話』による)。引用に際しては、ルビや注を省略したうえで、接続詞「したれば」「ほうして」で区切り、目印として丸数字を付す。

- ① とんと昔あつたずまナア。ある所に、爺つあと婆ちあ、居だっけど。かい餅こしえで食って、婆ちや、川さ井洗えに行つたどオ。

② したれば、川上から赤いこん箱と、白いこん箱が流ってきたけずまア。婆ちや、赤いこん箱こっちゃ来え 白いこん箱あっちゃ行げ 赤いこん箱こっちゃ来え 白いこん箱あっちゃ行げ て、言たど。

③ したれば、赤いこん箱あ、ニコニコッて、こっちゃ来たど。白いこん箱あ、アーンアーンッて、あっちゃ流ッて行たど。婆ちや、赤いこん箱拾て、家さ行ッて、開けて見たれば、めぐこえこえここ入ッて居だっけど。爺つあと婆ちや、めんごがて、白ッて名ッつけて育だど。こえここあ、お椀で飯食せッとお椀ぐらい、さ鉢で食せッどさ鉢ぐらい、ズン、ズンとおがッたど。

④ ほうして大けくなて、ある時、爺つあも乗れ、カンコーカエン！ 婆ちやも乗れ、カンコーカエン！ 歎も積ける、カンコーカエン！ 爺つあと婆ちや、白い歎積ける、二人で乗ッて山さ行たど。山さ行たれば、白あ、こご掘れ、カンコーカエン！ あそごも掘れ、カンコーカエン！ て、言たど。ほれで、爺つあと婆ちやア掘ッてみだれば、宝物あ、ザグザグど出はてきたど。爺つあど婆ちやア喜んで、白の背中さ積ける、家さ来たど。

⑤ したれば、ほの話ば、隣りの爺さま聞えで、自分も宝物欲すぐなッたずまホレ。

⑥ ほうして、「白ば、おれさ貸してけろ」て、言たど。「大事な白ださげ、貸さんなえ。」て、爺つあ言うど、隣りの爺さまあ、「ンだら、晩げ来て、ぶず殺して呉るぞう。」て、言たど。爺つあ、殺さッではえらんないと思て、仕方なく貸してやッたずまナア。隣りの爺さまあ、無理無理、白の背中さ吠なの歎の積ける、婆さまばも乗しえで、山さ行たど。

⑦ ほうして、「こご掘れ」なて言ねのに、ほごらじゅう掘ッて歩えだ

ど。ンだげんと、宝物なのさっぱり出はらねで、マン糞なのばっかり出はたけど。ほんで爺さまあ、こしえで白ば殺して、土さ埋めて、ほの上さちっちゃこえ松の木一本植えできたずまホレ。爺つあ、なが白ば返しに來ねさげ、隣りさ行ッてみだど。

⑧ したれば、隣りの爺さまあ、「宝物どころか、出はてきたのあ、汚えものばかりだっけさげ、ごしや腹焼げて、殺して、松の木植えで来たあ。」て言うさげ、爺つあ、泣きながら山さ行ッて見たど。

⑨ したれば、松の木あ、大けくおがッてえだっけど。ほれで、爺つあ、伐ッてきて、白こしえだど。

⑩ ほうして、婆ちやど二人で餅搗えだずま。

⑪ したれば、大判なの小判なの、ほれがら、宝物なの、えッばえ出はたずまナア。はえず聞いだ隣りの爺さまあ、また来たど。「ほの白、貸してけろ。」ッて。爺つあ、「貸さんなえ。」て、言うど、「ほれなら、晩げ来て、ぶず割ッて、炊えですまうぞう。」て、言うさげ、爺つあ、仕方なく貸してやたど。隣りの爺さまあ、婆さまと餅搗えだれば、瓦かけなの石ころなのばかり出はてきたど。爺さまあ、ごしやえで、ごしやえで、白ば鉞で割ッて、おがまさくべですまど。爺つあ、大事な白返してもらうべと思て行たれば、隣りの爺さまあ、「大判なの小判なの、さっぱり出はらねで、石ころなのばかり出はてきたさげ、ごしや腹焼げて、ぶつ割ッて、おがまさくべですまッた。」て、言たど。爺つあ仕方なえなあど思て、白燃やしたあぐ貰ッてきたど。

⑫ ほうして、ほのあぐば畑さ撒えだど。

⑬ したれば、畑一面、ひょうが出はたけずまナア。ほれで、ほのひょう、婆ちや取ッてきて、茹でで食たど。ほうすっど、爺つあ腹あ張ッて、屁出だど。ほの屁あ、綾や チュウチュウ 錦サラサラ ごよのまたの あわえから ツツラパン パン ピー っ

- て、聞こえるっけどオ。爺つぁ、なんべんたっでも、綾や チュウチュウ 錦サラサラ ごよのまたの あわえから ツツラ プンパンピーー って、いうのだっけど。ほれで、婆ちゃあ、「爺つぁ、爺つぁ、ほの屁、山形の旦那衆さ行って、聞かせだらええべ。」て、言うさげ、爺つぁ、出がけだどオ。
- ⑭ ほうして、山形の旦那衆の門、叩えて、「ドンドン！」「何者だァ！」「わたし最上の屁っぴり長者あ」「ほれであ一つたってみろ。」って、ゆうことになっただど。
- ⑮ ほうして、綾や チュウチュウ 錦サラサラ ごよのまたの あわえから ツツラ プンパンピーー ってたっだどオ。旦那あ、おもしろやがて、もう一回って言うさげ、また、綾や チュウチュウ 錦サラサラ ごよのまたの あわえから ツツラ プンパンピーー って、たっだどオ。旦那あ、喜んで、錢だの何だの、褒美、えっばえ呉でよこしたどオ。
- ⑯ したれば、隣の爺さまあ、はえずば聞えて、ひょう、えっばい食って、山形の旦那衆の所さ、出かけたどオ。
- ⑰ ほうして、「ドンドン！」「何者だァ！」「わたし最上の屁っぴり長者あ。」「ほれであ一つたってみろ。」ほして、綾や チュウチュウ 錦サラサラ ごよのまたの あわえから ツツラ プンパン まで行っただれば、「ビリビリッ！」って、ンコむぐしてすまたっけどオ。「汚え爺さまだあ、外さ投げで来え。」って、旦那が言て、若い衆達あ、爺さまば、たがて、外さ、ぶ投げだけどオ。爺さまあ、投げらっで、えだくして、「オエーン、オエーン！」て、泣えて、家さ行っただけどオ。どんびんさんすけホラの貝ボホーンボホーン

かなり長い引用になって恐縮だが、これが今回の検討対象となる「赤

いこん箱（屁ひり爺）」の全文である。採録時点での話者のテンポを重視して、とりあえず「したれば」「ほうして」で切ってみた。接続詞と言うなら「ほれで」(④⑨⑬)・「ほれがら」(⑪)・「ほうすっど」(⑬)・「ほして」(⑰)などもあるが、あまり細かく分けてしまつては逆に意味がなくなるので、「したれば」「ほうして」のみに限定しておく。それだけでなく、「晚げ来て」(⑥・⑪)や「ほうして」+「したれば」(⑩⑪・⑫⑬)のように、はっきりとした(無意識の?)話者の語りわけによる対応を垣間見ることが出来る。すなわち、この区分はあくまで語り口を優先するものであって、話内容の要素によるモティーフ別のそれではない。さて、この昔話の構成から何がわかるのであろうか。

第二節 〈花咲か爺〉としての「赤いこん箱（屁ひり爺）」

たいへん長い引用になったので、改めてモティーフごとに十項目にまとめ、粗筋ふうにはり直したうえでアルファベットを振り構成の要約を次に示す。このうち、B・D・Fに隣の爺(または夫婦)が絡むわけがある。

- () 語り初め……………①()
- A 犬の登場と成長……………①②③
- B 山の宝物による得失……………④⑤⑥⑦
- C 犬の死と墓標の松……………⑧⑨
- D 白の餅による得失……………⑩⑪
- E 白の焼却と「ひょう」……………⑫⑬
- F オナラによる得失……………⑬⑭⑮⑯⑰
- () 語り納め……………⑰()

印象的な出だしA (①②③) や、山伏の関与を窺わせる語り納め (⑰)

にも興味ひかれるが、この「赤いこん箱（屁ひり爺）」で、まず何より黙過すべからざる特徴は、話型的には、これがいわゆる〈花咲か爺〉とも〈雁取り爺〉とも違い、あえて言えば副題のごとく〈屁ひり爺〉と解しうることだ。この、大半の展開は〈花咲か爺〉（ないし〈雁取り爺〉）なのに、結末が「屁」で終わる当該昔話は、山形においてはもちろん、全国的にもたいへん珍しい事例と言える。この結末が、話者による意図的な改変や無意識的な錯誤でないらしいことは、ちゃんと語り初め・語り納めを具備するだけでなく、後述のとおり、山形県で語り継がれる他の〈花咲か爺〉（または〈雁取り爺〉）型の昔話と比較してみれば容易に想像がつく。当該「赤いこん箱（屁ひり爺）」の結末が偶発の一回的事例ではないこと、これが本稿でまず確認したいことである。そこで、「赤いこん箱（屁ひり爺）」という題名について一言したい。

元来、〈花咲か爺〉〈雁取り爺〉という話型名は、結末を基準に分類されたすぐれて換喩的な呼び方である。この種の話型の基本骨格が、犬による福德↓臼による福德↓灰による福德（さきの例ならば④↓⑪↓⑬⑭⑮）、というふうにまとめうる以上、〈花咲か爺〉〈雁取り爺〉という呼び方は灰によって何かもたらされたかの違いである。〈雁取り爺〉が話型的な〈花咲か爺〉の先蹤であるかどうかの詮索はさておいて、両方ともに灰が目に入る、というモチーフを共有することは看過しがたい。したがって、そのモチーフを持たない当該昔話に、文字化採録の際に「屁ひり爺」の副題を付して区別した処置は、応分の根拠が存在する。ただし厳密なことを言えば、話型としての〈屁ひり爺〉は、次節のように、通常、〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺〉〈竹取り爺〉などと分割して把握されるものであり、やはり「赤いこん箱（屁ひり爺）」という昔話名は少し誤解を招くものかもしれない。

昔話の具体的な題名（ここでは「赤いこん箱（屁ひり爺）」）は、ほとんどの場合、話者が固有名詞として自覚的に使用しているものではない。

当該昔話の命名由来について具体的な事情は一切わからないが、前述したように「屁ひり爺」の副題があることから、いずれ『せんとくの金』江口ヨシノとんと昔七十二話―』という本に採話された時点で暫定的に付されたものではないかと推察される。しかし、これも後述するように、「赤いこん箱（小箱？香箱？）』という呼称は、山形において〈花咲か爺〉系の昔話で「くいごこ（子犬？）むかし」などとともに、わりあい一般的に使用される題名である。結末の「花」や「雁」とは逆の意味で、冒頭の「箱」「犬」による換喩的な命名であるが、犬↓臼↓灰という変身による福德の点では、むしろ〈花咲か爺〉〈雁取り爺〉よりも当該話型の本質を突いたものと解釈することもできる。すなわち、「花」「雁」はあくまで互換可能な部分であり、したがって「屁」への変更もあながち荒唐無稽ではないことは、次節以降に改めて詳述する。

敷衍的に、口承文芸の文字記録化についての本稿の立場を補足しておく。もとより、昔話は口頭伝承として受け継がれ、無文字社会を基盤として成立する。したがって、その現われ方は特定話者の一回的な営為として語られるもので、時には「こうやって」とかというふうな仕草（身体言語）をも含む一種のパフォーマンスである。そして何より、そのディテールまで考慮するならば、同一話者が何度語ったとしても、ひとつとして単純な複製はまったくありえない性格のものである。

どだい、語りそのものの生態を文字として丸ごと再現定着させることはとても不可能である。時に話者が言いごもり、時に聞き手にさりげなく同意を求めめるなど、変幻自在な流動性に潜むその場の雰囲気や文字は無表情に均一化してしまう。極端な場合は、記録者の思いこみによって不適切な漢字が当てられたまま出版されたりもする。それはちょうど、古典文学作品の写本が近代に活字の注釈書として出版されるプロセスとも似ている。

ただ本稿の対象は、あくまで個々の語りの背後から話者を拘束して行く幻の台本としての話型である。さきに、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の結末は、話者による意図的な改変や無意識的な錯誤ではないだろうと述べたが、かりに百歩譲ってその場限りの例外的な語りがたまたま『せんとかの金—江口ヨシノとんと昔七十二話—』という書物に採られたとしても、本稿の立場からすれば、そのこと自体さしたる重要事と言うわけではない。もしそうだとしても、その暴走的な逸脱を誘引したものは何か、が次に問われなければならないだけだ。問題の核心は、毫も変わらない。

第三節 〈屁ひり爺〉という話型Ⅰ—研究の現段階

そもそも、話型としての〈花咲か爺〉〈雁取り爺〉と〈屁ひり爺〉とはどのような関係にあるのだろうか。〈花咲か爺〉〈雁取り爺〉については、さきほど若干ふれたので、ここでは〈屁ひり爺〉〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉の話型をめぐってちょっと復習しておきたい。

たとえば『日本昔話事典』は、〈屁ひり爺〉を立項しないが、〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉の説明が存する。まず、「たけきりじい・竹伐り爺」（笠井典子執筆）については

致富譚の1つで竹伐りの爺が自身の屁の妙音によって幸福になるという、招福の話。爺が山で木を切っていると殿様が通りかかり、「山で木を切る者は何者なら」と問う。爺が「日本一の屁こき爺」と答えると、「そんならひとつひってみろ」と言われる。爺は、「丹後但馬のタタラタン、備中備後のビーチビチ」と妙音をひって殿様にほうびをもらう。隣の欲深爺が真似て山へ行く。「山で木を切る者は何者なら」「日本一の屁こき爺」「そんならひとつひってみろ」ということで、屁をひると糞が出て尻を切られるという話。爺が山

で竹を切るといふ発端部分を欠いて、直ちに爺が屁を売りに行くというものもある。

と記され、説明はまだ続くが以下を省略する。

また、同じく「とりのみじい・鳥呑み爺」（笠井典子執筆）については、

動物の力によって致富となる本格的な話の1つ。爺が山へ行くと美しい小鳥が鍬の先に止まりよい声で鳴く。さしのべた手のひらに止まって美しい声で鳴くので思わず呑みこむ。小鳥が爺の腹の中にはいると、爺の尻から小鳥の足が出る。ひっぱると「びびんびよどり、五葉のおん宝。ピョンピョン」と妙なる音がし、爺は尻を鳴らして金もうけをして幸せになる。また、中国地方などでは殿様が通りかかり、「おまえは何者だ」「日本一のへっぴり爺」「ならひとつひってみよ」と屁をひってほうびをもらうと続く場合もある。後半に隣の爺が真似て失敗し、尻を切られるなどが多いが、前半の成功、または後半の隣の爺の部分だけで終ることも少なくない。

とあり、これも以下の説明は省略する。

『日本昔話事典』の両項目とも、かなり具体的な叙述なので、参考とした直接の典拠があるものと思われるが、それは明示されていない。一目すると、前者が「自身の屁の妙音によって幸福になる」のに対して、後者は「動物の力によって致富となる」と説明はされるものの、「日本一の屁こき爺」「日本一のへっぴり爺」などの共通性からも、両者がかかなり近い位置にある話型であることは明白である。「丹後但馬のタタラタン、備中備後のビーチビチ」「びびんびよどり、五葉のおん宝ピョンピョン」と相応の違いを見せもするが、その「妙音」を明記する

ところも似ている。ちなみに、後者の「五葉のおん宝」は、前掲「赤いこん箱（屁ひり爺）」の⑬⑭(F)とも接点を持つが、そのことに關しては次節以降に述べる。

さらに、さきの引用では省略した『日本昔話事典』の両項目には

この話型は中部地方から西日本一帯に成熟発達しており、「鳥呑み爺」が東日本に広く分布しているのと対照的である。

〔たけきりじい・竹伐り爺〕

鳥を丸のみしたことにより鳥が腹の中で鳴いたり、へそから出た物をひっぱると鳴いたりするという形が古型で、音芸としての屁の音が喜ばれるのは、竹伐り爺との接触融合以来かと考えられる。「鳥呑み爺」の話型が広く分布している東北、東日本、中部日本では、鳥の屁を売って金持ちになるという構成が多く分布している。

〔とりのみじい・鳥呑み爺〕

という解説も見える。

ここで注目したいのは、「鳥呑み爺」が中部地方を含む東日本に広く分布するという指摘である。試みに、『日本昔話大成』によってカウントされた昔話数を比較してみると、確かに〈鳥呑み爺〉は近畿以西が七十二話に対して中部以東が二〇一話、〈竹伐り爺（竹取り爺）〉は前者が一六九話に対して後者が三十九話であるから、いちおう『日本昔話事典』の記述は納得できる。ただ、周知のとおり中部地方はかなり広く、東に加えるか西に加えるかでバランスは大きく変わるので、その中間領域の数字をあえて除外して再度の東西比較を試みれば、〈鳥呑み爺〉が七十二話と九十一話、〈竹伐り爺（竹取り爺）〉が一六九話と三十五話、となる。〈鳥呑み爺〉はやや平均化するものの、〈竹伐り爺（竹取り爺）〉の西日本優位はさらに際だつ。もとより、話型認定のグレーゾーンも考慮

しなければならぬが、総じて『日本昔話事典』の説明はおおむね肯しうるものと言ってよからう。ただし、「屁の音が喜ばれるのは、竹伐り爺との接触融合以来か」というように、〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉という話型の東西対立が本来的なものであったかどうか、については、次節に述べるように、そもそも両話型をどう把握するかという問題とも絡むので、この段階ではなんとも即断はできない。むしろ『日本昔話大成』が、「竹取爺」について

この話の名称は屁ひり爺・鳥呑爺・竹取爺などと呼んでいるが、放屁の行為、原因、もしくは殿様に実演してみせる場所、もしくはその職業の名称に由来するもので、これらは同一タイプに属するものである。

と述べるところは穏当な見解と思われる。本稿で、〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉よりも、それらを包括的する術語として〈屁ひり爺〉の名称を多用する所以である。

しかしながら、さきの「赤いこん箱（屁ひり爺）」との関連からは、なにもまして特に重要な事実として、『日本昔話大成』での分類方法に注意しておかなければならない。すなわち『日本昔話大成』では、「本格昔話」の「隣の爺」という分類のもとに、「雁取爺」「鳥呑爺」「竹取爺」「花咲爺」を連続して並べるからである。この事実は、「赤いこん箱（屁ひり爺）」を検討するうえで非常に大きな問題を孕むので、なお迂回するようだが、柳田国男の所説を参考にしつつ、〈屁ひり爺〉と〈花咲か爺〉とをめぐって今少し検証を続けてみたい。

第四節 〈屁ひり爺〉という話型Ⅱ—柳田国男の見方

前述したとおり『日本昔話大成』は、「隣の爺」という分類下に「雁

取爺」「鳥呑爺」「竹取爺」「花咲爺」の話型四種を順次並列するが、この配列は『日本昔話大成』の前身『日本昔話集成』においても同じである。では、そもそも日本における口承文芸研究の祖である柳田国男は〈屁ひり爺〉の話型をどのように捉えていたのであろうか。

柳田国男が〈屁ひり爺〉の話型についてまとめた言及をしているのは、有名な『昔話と文学』(一九三八)においてである。『昔話と文学』は、〈かちかち山〉や〈猿地蔵〉など代表的な昔話を題材に、口頭伝承と文献記録との橋渡しを試みた著作で、今なおさまざまな問題を提起し続けている。当面ここで関係してくる論考は、『昔話と文学』の冒頭を飾る「竹取爺」「竹伐爺」「花咲爺」の三編である。その論点は多岐に渡るが、本稿との関わりから、特に次の三項目に集約しておく(『昔話と文学』は『柳田国男全集』による)。

まず第一は、「竹取爺」から「竹伐爺」へ。
柳田は周知のとおり、「竹取爺」「竹伐爺」の二論考において、『竹取物語』を口承文芸の流れのなかで定位置し直すという野心的な試みを行っている。すなわち、『竹取物語』のなかの歌句「よゝの竹取」に着目して、そこに「竹取爺」から「竹伐爺」に至る竹細工職人という説話の担い手を抽出する。昔話「赤いこん箱(屁ひり爺)」で言えば⑭⑰(F)の「わたしゝ最上の屁っぴり長者ゝ」、前引『日本昔話事典』の例で言えは「日本一の屁こき爺」「日本一のへっぴり爺」と、それぞれ唐突に「長者」や「日本一」と名告りあげるだけの一種の必然があったというわけである。しかし、なにより本稿との関連からは、

関西の方では一般に、屁こき爺というちつと尾籠な名で知られて居る昔話が、土地によっては又竹伐爺の名を以て呼ばれて居る。…略…
我々の竹伐爺には、小さい美しい天女は終ひまで出て来ないが、其代りには小さな美しい鳥が来て、主人公を幸福の生活に導いて居る。

(「竹取爺」)

という記述が見逃せない。

前半で「屁こき爺」と「竹伐爺」とが同じものであること、後半でその「竹伐爺」には『竹取物語』のような「小さい美しい天女」ではなく「小さな美しい鳥」が登場すること、をそれぞれ指摘する。言うまでもない、「小さな美しい鳥」は〈鳥呑爺〉を示唆するわけである。すなわち、柳田は、〈屁ひり爺〉を〈竹伐り爺(竹取り爺)〉とほぼ同じ概念で用い、〈鳥呑爺〉の話型をそこに包摂していることになる。現に、柳田は「佐々木喜善君の如きは、総称して之を鳥呑爺と名づけようとして居た」(「竹伐爺」といささか懐疑的な口吻である。さきの『日本昔話大成』が、「屁ひり爺・鳥呑爺・竹取爺」を「同一タイプ」と認定したことを改めて想起したい。ただし、それらは柳田にとって、「かくや姫の鶯の卵」を媒介とした、あくまで『竹取物語』あたりから滔々と流れる系譜のもとに位置づけられるわけである。

第二は、『福富草紙』に記された放屁音。

柳田は、「へひり爺の、たつた一種だけ文書に伝はつて居るもの」(「竹伐爺」)であるお伽草子の絵巻『福富草紙』に着目する。現在では「放屁合戦絵巻」の存在も知られるようになったが、当時として『福富草紙』への言及それ自体きわめて先駆的な業績である。しかし何よりも、柳田の炯眼は「あやつ、にしきつ、こかねさらく」(春浦院蔵古絵巻「福富草紙」)という放屁音の画中詞に注目したことにある(『室町時代物語大成』による)。これと類似した放屁のオノマトペは、現行〈屁ひり爺〉の昔話でも、

「黄金さらく」の方は中国地方にも伝はつて居る。…略…中部から関東にかけては、此言葉がもう可なり変つて鳥の声に近くなつて

居るやうだが、越後や奥羽に行くとき再び錦さら〜が出て来る。…略：「五葉の松原」は福富草紙の方には無いけれども、全国各地に保存するから、古くからのものであったらうかと思ふ。（「竹伐爺」）

というように幅広く見出すことができる。

日本の東西に離れた周囲的な分布状況は、十五世紀の都文化の中で制作されたと思われる『福富草紙』の画中詞と遠く呼応しているにちがいない。しかも、その多くは「あや（綾）つゝ、にしき（錦）つゝ、こかね（黄金）さら〜」に「五葉の松原」が付加された形の擬聲音なのである。ここに至って、前掲の「赤いこん箱（屁ひり爺）」の⑬⑭⑮（F）と『日本昔話事典』の「びびんびよどり、五葉のおん宝ピョンピョン」も、これら一連のオノマトペに属することが了解できてこよう。そして、「中部から関東にかけては…鳥の声に近くなって居る」というところは、『日本昔話事典』の〈鳥呑み爺〉に言う分布とも偶合するのである。これは、次の重要な論点とも密接に絡み合ってくることになる。

すなわち第三番目は、〈屁ひり爺〉と〈花咲か爺〉との接触、である。柳田は、「あやつゝ、にしきつゝ、こかねさら〜」系のオノマトペを、「竹伐爺」に限らず全国各地から収集するが、そのなかで放屁音ならならざる若干の黙視できない例外を紹介している。具体的には、「幼い者が一寸した怪我などをした時」の呪文とする事例（「竹取翁」）、「屁ひり爺」に限らず一般の昔話の語り収めに使用する秋田の事例（「竹伐爺」）、そして新潟の「花降り爺」で「灰を撒く詞」として唱える事例（「花咲爺」）、である。この「灰を撒く詞」が、本稿で取りあげた「赤いこん箱（屁ひり爺）」とまったくの合致を見せることの重要性については次節に述べるとして、ここでさしあたり留意したいのは、

それだから矢鱈に人の真似はするもので無いと、など、謂つて小兒

を笑はせて居る。瘤取雁取を始めとして、此型は我邦にはよく発達して居る（さうして花咲爺の後段は多分雁取爺と此竹伐の混成改作であらうと思ふ）。（「竹取翁」）

と、柳田が〈花咲か爺〉を比較的新しい昔話と捉えているらしい点である。この引用文は、昔話「竹伐爺」の結末に言及した個所で、「此型」というのは〈隣の爺〉の話型であることに相違ない。その意味から、『日本昔話集成』『日本昔話大成』で、上位分類「隣の爺」のもとに「瘤取雁取」を配置するのはそれなりの根拠が存する。しかし、後年の『日本昔話名彙』（一九四八・三）においても、「完形昔話」のうちの「動物の援助」として、「花咲爺」「竹伐爺」「鳥呑爺」を列挙するとおり、あくまで柳田の〈花咲か爺〉に対する関心は、終始一貫「動物」⇨犬にあったことは疑いない（『日本昔話事典』〈鳥呑み爺〉に言う「動物の力によって致富となる本格的な話」）。少しわかりにくいのは、「花咲爺の後段は多分雁取爺と此竹伐の混成改作」というところであろうか。

〈雁取り爺〉が〈花咲か爺〉の先行形で、その「後段」が「雁」から「花」に変化したものであろうとは、柳田自身も想定済みである（「花咲爺」）。その事実も踏まえて推測するならば、ここに言う「此竹伐」の具体的内実とは、前掲引用部分の直前で柳田が述べたところの、「隣の爺」が「尻を切られ」「血だらけ」なのをその妻が「赤い衣装」と勘違いした、という展開を指すことにまちがいない。「赤いこん箱（屁ひり爺）」の色彩をどこかで連想させる、この結末を持つ〈花咲か爺〉は、柳田も簡単にふれ、曲亭馬琴の『燕石雜志』に早く見えるところでもある（これについては『福富草紙』も含め次節以降を参照）。こうしたヴァリエーションの存在は、「灰から以後は中古からの付け足しであつたかも知れぬ」（「花咲爺」）という推定を裏づけるものと言えよう。

第五節 山形県内における〈花咲か爺〉の諸相

こう見てくると、〈隣の爺〉の話型で、〈花咲か爺〉と〈屁ひり爺〉とを一括りするよりも、『昔話と文学』における多元的な問題把握の方が、昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」の解析では有益と思われる。『竹取物語』との接点は未知数であるにせよ、特に、『福富草紙』までさかのぼる放屁音（「綾やチュウチュウ錦サラサラ：ツツラパンパンピー」）は、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の背後に話型〈屁ひり爺〉の広大な伝承の裾野を想像させる。「花咲爺の後段は多分雁取爺と此竹伐の混成改作」であるとするならば、かりに昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」の結末が話者の意図的または無意識の突発事だとしても、その根っこは存外深いところにあったと言わねばならぬ。そこで、山形県内で報告された〈花咲か爺〉の諸事例と俯瞰的に比較することで、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の特質を今度は搦め手から際立たせてみたい。ここで具体的な手がかりとするのは、「赤いこん箱（屁ひり爺）」と似て非なるモチーフ、前述の「灰を撒く詞」および「赤い衣装」である。

現在まで管見に入った、いわゆる〈花咲か爺〉と認定しうる山形県内の口承文芸は、当該「赤いこん箱（屁ひり爺）」を除いて都合三十五話を数える。取材範囲に多少のズレがあるので単純比較はできないが、『日本昔話大成』では山形県の〈花咲か爺〉として三十二話を登録しており、この数は新潟県の二十七話、福島県の十七話を抑えてトップの数字を誇る。このような最多レベルの山形県においてさえも、当該「赤いこん箱（屁ひり爺）」のように、後半を〈屁ひり爺〉で終息させる語りはほかに存在しないようで、おそらく全国的に見てもこの結末はたいへん稀有なものと思われる。

しかるに、「あやつ、にしきつ、こかねさら〜」系の唱え言を「灰を撒く詞」として用いた事例となると、柳田の言う新潟の「花降り

爺」に限らず、東北地方の〈花咲か爺〉においていささか目立ち、そのなかでも山形県では全三十五話のうち十七例というほぼ過半に迫る高率である。ためしに、そのいくつかを掲げてみよう。

アヤはチュウチュウ コガネ ザラザラ チチンボン パラリン
 「花咲じじい（話者：佐藤まつ）」「蛇むこむかし・白鷹の民話」
 チチン ポイポイ コガネ サラリン

「くいこむかし（話者：赤木精作）」「米沢市築沢の昔話」
 ピンパラリー ごよーの松

「花咲爺（話者：阿部きよめ）」「庄内昔話集（全国昔話資料集成37）」
 あやちゅーちゅー にしぎさらさら ごよーのたがらをもってまい
 れ ちちん ぶん ばらりん

「花咲がちんち（話者：佐藤ツギ子）」「真室川町の昔話Ⅲ」

依拠文献の刊行に対応させ、一九六〇年代から九〇年代まで各一冊づつを選択した。いずれの昔話の場合も便宜的な標題だが、ここでも「くいこむかし」の名称が顕在化する点には注意を払っておきたい。ただし、「くいこむかし」も「花咲爺」「花咲がちんち」も、発端と末尾との違いこそあれ、換喩的な命名であることだけは変わらない。

さて、これらの引用部分は、さきにも述べたごとく、いずれの〈花咲か爺〉においても、正直爺が花を咲かせる時に唱える呪言であり（オナラはまったく関係ない）、まぎれもなく柳田国男が指摘した新潟の「花降り爺」の事例に適合する。おのおの表面上かなり違って見えるが、「五葉の松原」との接点も明白であって（「ごよーの松」「ごよーのたがら」）、古く『福富草紙』に断片的な姿を見せ、「赤いこん箱（屁ひり爺）」にも現われるオノマトペと同系統に属するものに間違いない。ちなみに、柳田国男が「幼い者が一寸した怪我などをした時」の呪文とする事例

〔竹取翁〕も、山形では『安楽城の伝承(一) —佐藤陸三さんの語り—』に真室川町の「子どもの呪文唄」として紹介されている。

ここで、放屁の音声が本来のものか、呪文の詞章が先行するののか、を論じてあまり生産的ではないだろう。もしかすると、「綾」「錦」「松」などめでたいものを列挙する不思議な呪言は、もともと「福をもたらす春のことぶれの寿詞」(白田甚五郎「尻ひり爺」『尻ひり爺その他(昔話叙説Ⅱ)』一九七二・五)だったのかもしれない。

このことと関連して、検討対象としたいのは、「赤い衣装」のモチーフである。「赤い衣装」とは前述したように、「隣の爺」が罰を受け「血だらけ」になるという、いくつかの〈花咲か爺〉が持つ少々残酷な結末を指す。これまた『福富草紙』とも関わるモチーフで新潟県などでは目立つが、山形においては決して多い結末ではない。しかし、この結末はさきの「あやつ、にしきつ、こかねさらく」系の「灰を撒く詞」といっしょに現われるケースが多いようで、前掲の四例のうち次のように実に三話までがこの「赤い衣装」で終わる。

家にいたばんさは今来っか、今来っか出て見だどころさ、真っ赤な身体して来たから、「いや、おらえのじさま、赤い衣装で来た」ていたどころが、衣裳でなくて、血だら真赤な体だったぞ。

〔「花咲じじい」『蛇むこむかし』〕

婆さまは、こんど、爺さまきょう、着物えっぺ貫て来んなださげ、けじきだ着物なの着ねてえ、て、下水さつつ込んで、屋根の上さあがて、籠たげで、湯文字もなぐで、尻、へらでペンペンど叩で、「こんだ爺、無もんだ、赤っげ手拭なのかぶて来る。家さも来ねうじ、なんて話だ」て言たば、爺さまみんなが叩がった血だなだけぞ。

〔「花咲爺」『庄内昔話集』〕

ほーしっどまめぢあ、あーん、あーん、て泣きながら来たけど。ほしたらば、へちゃへちゃばさま、ほれど知らねえで、「あー、おれあえのぢさま、たがらおのえっぺえもらて、よるこで、うだがげで来たであ」て、ゆったけど。ほんでも近くまで来たな、えっくみだえば、うだどころか、ぢさまいでえくていでえくて、声あげで、あーん、あーん、て泣きながら来たなだけぞ。

〔「花咲がぢんぢ」『真室川町の昔話Ⅲ』〕

一番目の「赤い衣装」(「花咲じじい」)や二番目の「赤っげ手拭」(「花咲爺」)に対して、三番目の「うだ(歌)がげで来たであ」(「花咲がぢんぢ」)という違いはあるものの、「泣きながら来たな」ことを誤解したという点で、基本的には他の二話と同系統と考えてよい。

なかでも『庄内昔話集』の「花咲爺」は、早合点した婆が古着をさっさと処分する結末で(「けじきだ着物…下水さつつ込んで」)、次節のとおり『福富草紙』と一番近い。また、「屋根の上さあがて、籠たげで…尻、へらでペンペンど叩で」という印象的な描写は、東北地方で多く報告される、不思議な籠で放屁を調節して出世する〈尻鳴り籠〉という致富譚の話型とも連絡する。いずれにせよ、「あやつ、にしきつ、こかねさらく」系の「灰を撒く詞」から、同じく『福富草紙』と関わる「赤い衣装」、そして昔話の〈尻鳴り籠〉に至るまで、山形県の〈花咲か爺〉は放屁譚との交錯が多岐にわたっており、その土壌のうえに当該「赤いこん箱(尻ひり爺)」が定位されるとおぼしい。そのような視点から改めて見直すならば、「オエーン、オエーン!」て、泣えで、家さ行ったっけどオ。」(「赤いこん箱(尻ひり爺)」⑩)と「あーん、あーん、て泣きながら来たけど。」(「花咲がぢんぢ」『真室川町の昔話Ⅲ』)との間柄も、なにやら無縁ならざるものを感じさせよう。

ちなみに、放屁音「あやつ、にしきつ、こかねさらく」と「赤

い衣裳」に早合点する隣の婆の組み合わせは、もちろん山形においてもどちらかと言えば〈屁ひり爺〉系の昔話（厳密には〈鳥呑み爺〉）でこそ顕著に窺えるものである。なかでも注目したいのは、隣の爺が放屁を真似するために、「すべらびょう」（「屁っぴり爺さま（話者…佐藤テツエ）」『新庄のむかしばなし』）や「牛蒡だのヒョウだの」（「屁つたれ爺さん（話者…高橋さつよ）」『大江の民話』）を食べる昔話の存在が、明白に「赤いこん箱（屁ひり爺）」⑬の「ひょう」（いわゆるスベリヒユ）と対応することである。ここでも、「赤いこん箱（屁ひり爺）」は〈鳥呑み爺〉系の〈屁ひり爺〉ときわめて具体的に結びつく。

第六節 江戸時代の〈花咲か爺〉 I — 『福富草紙』と『燕石雑誌』

さて、前節では「赤いこん箱（屁ひり爺）」における〈屁ひり爺〉的な結末を中心として、主に山形県内の現行昔話との比較を試みてきたが、本節と次節ではここでは何度か言及してきた『福富草紙』を媒介として、江戸時代の資料を参考とすることで、山形の〈花咲か爺〉をめぐる問題について少しく通時的な観点を補強してみたい。

〈花咲か爺〉の昔話がいつごろ発生したのか、はたしてその前身を〈雁取り爺〉と断言してよいのか—もとより、これら難問の解決にはまだまだ決定打を欠くというのが正直なところだ。だが、とにかく〈花咲か爺〉が有名になってきたのは、五大昔話のひとつとして数え上げられるようになった江戸時代後期と思われる。その時代、〈花咲か爺〉に『福富草紙』からの影響をはっきり指摘したのが、曲亭（滝沢）馬琴である。

馬琴は文化八・一八・一一年、柳田もふれた『燕石雑誌』四・七の「花咲か爺（はなさきのおきな）」で、「童話（わらべのものごと）に云く」としておおむね以下のように書いている（『日本随筆大成』による）。長く

なるのでややその「童話」を恣意的に摘記するならば、「老夫婦」が「養たる犬の蹴くところを掘りて、思ひもかけず金を得」、隣の「腹あしき夫婦」が真似するも失敗し「犬を殺し、道次なる小松の下に埋たりしに、その松俄に大きになり」、その松で作った臼で、「翁」は「麦など舂に、麦は底よりわきて、物へうつし入るゝに尽ることなく、「隣のをとこ」は「麦を舂に、麦はみな砕けて虫になれば、ますくいかりて臼を打くだきつゝ、薪に」するが、「翁亦彼の臼の灰をとりて枯木に花を開し、国の守より金銀衣装など、あまたの恩賞給はりて、花咲の翁と口さ」れ、「隣のをとこ」はまたしても真似して失敗する、というお馴染みの筋立てである。ところで、『燕石雑誌』における「隣のをとこ」の灰撒きの失敗は、次のように記されて結ばれる。

隣のをとこ又これを羨み、彼の灰をもて枯木に花を咲せんとて、舂みて枝にふりかくるに、花はさかでその灰国の守の眼の中に入にければ、従者どもやすからぬ事かなと、いきまきて手ごとにくたくち懲らせば、忽ち頭を傷られ血に塗つゝ、辛じて逃てかへるを、妻なりける女門より遙に見て、あなわが夫は守より紅の衣など、夥被させ給へりと悦ぶ程に、近くなるまゝよく見れば、衣にはあらで血に染たるなり。夫はやがて病ふして、遂にむなしくなりたりといふ事。

「忽ち頭を傷られ血に塗つゝ…衣にはあらで血に染たるなり」という部分こそ、まぎれもなく前節で言及したいいわゆる「赤い衣裳」のモチーフである。この引用部の分量が、当該「童話」の約三分の一とアンバランスの感も否めず、その意味では馬琴の要約の仕方にやや彼なりの思い入れがないとは言えない。また、「老夫婦慈悲をもて旨とするありけり」という「童話」の始まりも、ちょっと儒教的というか、いささか勧善懲

悪的な編集が感じられなくもない。しかし、柳田国男も言うとおり、「赤い衣装」は現行〈花咲か爺〉のなかでも認めうるから、このような終わり方を持つヴァージョンが確かに馬琴の時代にも存在したと思われる。興味深いのは、馬琴がこの終わり方について、同じく『燕石雑誌』の「花咲翁」後半で左のようにコメントしていることだ（なお同様の指摘は『嬉遊笑覧』九にも見られる）。

となりのをとこが血に塗れて帰るを、妻の女遙に見て、紅の衣給はりてかへるにこそと、うれしく思ひしといふよしは、福富の草紙といふ絵巻物のおもむきに似たり。しからば花咲の翁は、福とみの翁を思ひよしたる歟。

ただ単に『福富草紙』というだけでなく、「福富の草紙といふ絵巻物」なる視覚的なものとしても捉えていることは、次節にも関わるポイントなので注意しておきたい。そして、「福富の草紙といふ絵巻物のおもむき」の中身「となりのをとこが……うれしく思ひし」とは、まさしく前述「赤い衣裳」のことで、春浦院蔵古絵巻「福富草紙」にて当該箇所を掲げれば

おほちは、色／＼の御そとも、かつきて、おはするめり、ふるきぬとも、みなやきてん、あなうれしや

という、血だらけの夫を誤解する隣の婆のセリフあたりが該当しよう。この「福富草紙」の「色／＼の御そとも、かつきて、おはするめり」は、『燕石雑誌』所載の「花咲翁」の「紅の衣など、夥被させ給へり」と照応することに疑いない。ここで、馬琴が「衣にはあらで血に染たるなり。夫はやがて病ふして、遂にむなしくなりたり」あるいは「紅の衣給はり

てかへるにこそと、うれしく思ひし」と、『福富草紙』のような古着焼却までは書いていないことに留意したい。現行〈花咲か爺〉の場合でも、前掲『庄内昔話集』みたいな結末はあっても、上記「福富草紙」のように焼却までするものは珍しい。

そもそも『福富草紙』には、本稿でこれまで使用してきた春浦院蔵古絵巻「福富草紙」系の二巻本のほか、「隣の爺の失敗と婆の強欲を笑う内容の、二巻本の下巻が独立した」一巻本も存在する（『お伽草子事典』）。基本的に〈屁ひり爺〉という内容は変わらないが、前者では隣の爺が福富織部と呼ばれるのに、後者ではそれが主人公の名前に転用されるなどの違いもある。だから、『燕石雑誌』の「花咲の翁は、福とみの翁を思ひよしたる」という言い方へ神経質になるのならば、馬琴は一巻本の方を意識しているとも解せなくもない。だが、一巻本より二巻本の方が江戸時代以降かなりの流布を見せているし、なにより放屁音「あやつ、にしきつ、こかねさら／＼」の画中詞は看過しがたい。春浦院蔵古絵巻「福富草紙」の存在によって、十五世紀までさかのぼりえた〈屁ひり爺〉は、〈花咲か爺〉の話型より確実に先行するものと推量してよいであろう。

翻って話を『燕石雑誌』の「花咲翁」にもどせば、この「童話」は「養たる犬の跌くところを掘りて」や「白に挽て麦など春に」など、実のところ「赤いこん箱（屁ひり爺）」とは確かに相違点が目立ちすぎる。だが、その違いを差し引いても、『福富草紙』の結末から明白に影響を受けた〈花咲か爺〉が、江戸時代後期の時点で確実に存在していた徴証として、『燕石雑誌』の記事はきわめて重要なものと考ええる。「赤いこん箱（屁ひり爺）」に見られる〈屁ひり爺〉的な結末は、〈花咲か爺〉のみならず〈雁取り爺〉の話型を考えるうえでも、単なる後発的些末現象として一蹴しえないことになるわけなのである。

第七節 江戸時代の〈花咲か爺〉Ⅱ—草双紙の世界から

前節では、『福富草紙』の「赤い衣裳」を手がかりにして、馬琴の考証を本稿なりになぞり直すことで、改めて「赤いこん箱（屁ひり爺）」のような展開が発生する可能性について再確認した。もっとも、ここまでの考察はいささか〈屁ひり爺〉的な結末に偏したもので、今度は話題を少し全体的な構成にも広げながら、山形県の〈花咲か爺〉が持つ古態性についてもふれておきたい。

実は、『福富草紙』という接点に拘泥しないのであれば、江戸時代における〈花咲か爺〉関係資料はもっとさかのぼりうるようだ。すなわち、草双紙と汎称される赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻のたぐいに、かなりの〈花咲か爺〉物が出版されている（瀬田貞二「花咲爺」『落穂ひろい（上巻）—日本の子ども文化をめぐる人びと—』一九八二・四、内ヶ崎有里子「花咲爺」『江戸期昔話絵本の研究と資料』一九九九・二）。初期草双紙には刊年不明のものが多くいけれども、その何点かは『燕石雜誌』をはっきりとさかのぼりうるものと断定できる。ここでは、そのなかでも一番古いとおぼしき赤本『枯木花さかせ親仁（かれきにはなさかせじ）』を取りあげる。該書は作者・出版年時ともに不明ながら、挿絵が鳥井清満の手になるようだから、その成立は宝暦・明和（1751～1772）くらいだろうか。つまり、『燕石雜誌』より半世紀ほど早い。『枯木花さかせ親仁』の「再刻再板と紹介されている作品」（内ヶ崎「江戸期昔話絵本に見る赤本と黄表紙のかかわり—赤本とかかわりの深い黄表紙三作品をめぐる—」前掲書）が、『古昔花咲勢親父（むかしくはなさかせち）』（寛政九1797年？）として黄表紙にも存在することから、この話の内容が十八世紀後半における〈花咲か爺〉の標準的なイメージを提供していることが推知される。

『枯木花さかせ親仁』は全十画面で構成される絵本だが、前掲の内ヶ

崎論文「花咲爺」によれば筋展開は次のとおり（『枯木花さかせ親仁』は『岩崎文庫貴重本叢刊』による）。

- (1) 川上から犬が出現する。
- (2) 正直爺、犬の教えにより金銀を得る。
- (3) 慳貪爺、正直爺の真似をするが失敗し、犬を殺す。
- (4) 正直爺、白より金銀を得る。
- (5) 慳貪爺、正直爺の真似をするが失敗し、白を燃やす。
- (6) 正直爺、枯れ木に灰をまき、花を咲かせ褒美を得る。
- (7) 慳貪爺、正直爺の真似をするが失敗する（殺される）。

絵画の側からは、一丁表が(1)、一丁裏が(2)、二丁表裏が(3)、三丁表が(4)、三丁裏が(5)、四丁表が(6)、四丁裏・五丁表が(7)、五丁裏は後日譚、という場面对応になる。この『枯木花さかせ親仁』には、昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」ともこれまでにない共通性が披見される。すなわち、(1)の川から犬が出現するという点である（「赤いこん箱（屁ひり爺）」で言えば、①②③またはA）。

もっとも、川で犬に出会う冒頭の〈花咲か爺〉は、なにも「赤いこん箱（屁ひり爺）」に限らない。たとえば、「赤いこん箱（屁ひり爺）」を含めた山形県内の〈花咲か爺〉全三十六話のうち、実に二十九話までが犬の出現場所を川とする。うち、十七話は「赤いこん箱（屁ひり爺）」同様、婆による二個の箱からの選択という発端なのに対して、十一例は魚取りに行った二人の爺の得失で始まる点、なにやら『枯木花さかせ親仁』に近い（残り一例は単純に婆が犬を拾う）。しかし、『枯木花さかせ親仁』の冒頭(1)は、洗濯に来た「正じきば、（正直婆）」が「ちん（狎ころ）」を、「けんどんば、（慳貪婆）」が「めしびつ（飯櫃）」を、と対照的な二人の婆の登場でなにより独自性を示す。

そもそも、二人の婆の得失で始まる〈花咲か爺〉は、全国的に見渡しても、現行の昔話ではほとんど存在しないようである。考えてみれば、婆一人による箱の選択も得失を意味するから、〈隣の爺〉の極端な変形と解することもできよう。川を流れる箱という発端は、〈雁取り爺〉のみならず〈桃太郎〉や〈瓜子姫〉の一部にも見られ、そこに「神の御授け」による「非凡児」の出現という性格を読み取ることもできよう（柳田「花咲爺」前掲書）。だが、いずれにせよ『枯木花さかせ親仁』のごとく、最初から〈隣の爺〉ならぬ二人の婆が登場する事例は珍しい。あるいは、『枯木花さかせ親仁』の独創と考えてよいのかも知れない。当然、細部では食い違う点も少なくないが、「赤いこん箱（屁ひり爺）」を代表とする山形の〈花咲か爺〉譚を考えるうえで黙視できない共通点がひとつ存在する。それは、犬の巨大化である（「赤いこん箱（屁ひり爺）」の③またはA）。

『枯木花さかせ親仁』では、(2)「ちん（狎）ころ大きくなり」(3)「せなか（背中）にすきくハ（鋤）を付（付）け」と表現される。挿絵を見ると、確かに犬というよりは豚(?)と見まがうばかりに丸々と太って、背中に農具入れの吠をしょい、そこに鋤を入れ、鋤は外に出してある。この鋤・吠とは、たとえば「赤いこん箱（屁ひり爺）」④の「鋤も積ける、カンコーカエン！吠も積ける、カンコーカエン！」という、犬の「白」の吠え声(?)に対応する即物的な視覚化にほかならない（白い動物の聖性は言うまでもない）。もとより、この吠に鋤を入れた犬は、山形以外の〈花咲か爺〉にも登場しないわけではないが、とにかく『枯木花さかせ親仁』（『古昔花咲勢親父』も）がそれらと強い連関を見せる。『枯木花さかせ親仁』には、まさしく「民間説話」が「絵」に表現され、文の説明を省いた「要素を認めうるのである」（『近世子どもの絵本集・江戸篇』注）。

ちなみに、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の⑩では「餅搗えだずま」と語

られるが、山形県の〈花咲か爺〉では松から作った挽き白（木磨り白）と明言する昔話が十二例あり、他県と比べてもやや顕著的な傾向を見ている（一例を除き残りすべてが川で犬を拾う形式の昔話）。偶然かもしれないが、『枯木花さかせ親仁』でも、(4)に「うす（白）」を碾くと「金銀ひきいたす」とあって、挿し絵でも明確に挽き白を描く。山形の〈花咲か爺〉の古態性を暗示するものと言えようか。

『枯木花さかせ親仁』の(2)(3)(4)をとおして、山形の〈花咲か爺〉が多く江戸時代後期までさかのぼるモチーフを持つことを再確認したが、ついでに赤本『花さきち、老楽のゑいぐわ』にもふれておきたい。

『花さきち、老楽のゑいぐわ』は奥村政信の絵で、『枯木花さかせ親仁』との成立先後も微妙であるが、いちおう後者の刊行が早いと推測されている（『近世子どもの絵本集・江戸篇』解題）。残念ながら、『花さきち、老楽のゑいぐわ』は後半部分しか伝存しないので、肝心な犬の様子が始まり『枯木花さかせ親仁』の「金銀」も挿し絵は大判小判、末尾の「ちん（狎）ころがおかげじや」など、どうやら『枯木花さかせ親仁』とも無縁ではなさそうである。『花さきち、老楽のゑいぐわ』で注意したいのは、「正じきち」が灰を撒くシーンで「はい（灰）をこにまぶるよう：はな（花）ができ申ます」と、あたかも造花を製作するがごとくに説明され、さらに結末部に至っても「はい（灰）を入しぎる（箆）より金銀せにわき出て」と、一貫して「灰の再生呪力」（野本寛一「花咲爺」『共生のフォークロア・民俗の環境思想』一九九四・四）が強調されるなど、改めて〈花咲か爺〉が基本的に犬の物語であることを再認識させられる。加うるに、『花さきち、老楽のゑいぐわ』の挿絵では、「けんどんじ、い（慳貪爺）」が「た、（叩）かれよろばいある（歩）きつへ（杖）をつき」帰ってくる姿が、まさしくさきの『福富草紙』の打擲された「赤い衣裳」の画面そっくりであることも、結末部分を後代的

転加とする柳田のさきの予想にも合致するものであろう。

第八節 東アジア近隣諸国の〈花咲か爺〉

さて、本稿冒頭で「狗耕田」故事にふれたので、最後に〈花咲か爺〉の国際的な拡がりに関して略述したい。実は、ここでも「赤いこん箱（屁ひり爺）」の結末が少なからぬ存在意義を持ってくるからである。もとより、日本国内でさえおぼつかないのに、海彼の資料を扱うのは、いささか本稿の手にあまる作業であるが、以下、日本語で書かれた論文のみを参考とするやや手荒な比較検討を試みたい。

〈花咲か爺〉と近似した「狗耕田（耕田狗）」という民間説話が、中国なかでも長江以南に、かなり多様で濃密な分布を見せ、そのことは大による穀物将来説話とも関わるだろうという仮説が提示されている（伊藤清司「新嘗祭の村々を訪ねて―穀物将来説話と「花咲か爺」の原像」『中国民話の旅から―雲貴高原の稲作伝承（NHKブックス474）』一九八五・二）。就中、柳田も「中古からの付け足しであつたかも知れぬ」と述べた散灰以降の展開が、中国においても「竹伐爺型」「猿地藏型」「枯樹開花型」と大きく三分類できる、との指摘はきわめて重要である（伊藤清司「昔話「花咲か爺」の祖型」『〈花咲か爺〉の源流（新民俗文化叢書3）』一九七八・四）。

日本の「灰播き話」（柳田「花咲か爺」）は、これまで述べてきたとおり、その結末によって〈花咲か爺〉と〈雁取り爺〉、そして例外的なものとして本稿で扱った「赤いこん箱（屁ひり爺）」などが存在していた。それらを、中国の伝承事例とつきあわせれば、いわゆる〈花咲か爺〉は「枯樹開花型」、「赤いこん箱（屁ひり爺）」は「竹伐爺型」に、それぞれ該当する。一方、〈雁取り爺〉に対して「猿地藏型」は食い違うが、どちらも〈花咲か爺〉〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉とともに、「動物の援助」（『日本昔話名彙』ないし「隣の爺」（『日本昔話集成』『日本

昔話大成』）として一括される話型である。いずれにしても、「赤いこん箱（屁ひり爺）」に似た結末が、中国の「狗耕田（耕田狗）」においても見受けられ、「竹伐爺型」と言われるように、その報告例も決して少なくないことは注目せざるをえない（直江広治「狗耕田譚（犬が畠を耕す話）」『中国の民俗学（民俗民芸双書13）』一九六八・四）。ただし、ここで無視できない問題が存在する。それはほかならぬ中国の「竹伐爺型」とは、「香屁」であることだ。

たとえば、浙江省の「狗耕田（耕田狗）」はおおよそ九種類に分けられると言う（劉魁立「民間説話の生命の木―浙江省現代狗耕田タイプの形態構造分析―」『比較民俗研究』二〇〇二・十一）。多様なそれらを、やや強引だが、本稿の趣旨にそくして最大公約数的なモチーフごとまとめ直してみれば、

- a 財産分けにより犬を獲得する弟
- b 犬の耕作による得失
- c 兄による犬の殺害と墓標の植物
- d 植物を加工した器物による得失
- e 灰を肥料とした豆
- f オナラによる得失

とでもなるうか。

アルファベットは、さきの「赤いこん箱（屁ひり爺）」要約に対応させた。どうやら、浙江省の事例ではdで終わってしまうものが多いようであり、その終わり方も怒った兄が木製品（白など）を燃やすと家まで焼けてしまう、という徹底した信賞必罰のパターンを持っている。さらにbの段階でも、犬が耕作するかどうかの賭け事での得失が含まれるなど、かなり特徴的である。そのなか、ここにもやはりe・fという「竹

「伐爺型」が確かに存在している。しかし、見逃してならないのは、ここでのオナラも前述した良い匂いの「香屁」であることだ。「赤いこん箱（屁ひり爺）」、あるいは〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉のような妙な音を発するオナラではない。

日本には、〈屁ひり爺〉のみならず、オナラの恐るべき爆風を語る〈屁ひり嫁（へやの起こり）〉という笑話もあるが、昔話における屁のイメージは、やはり〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉など、あくまで基本は聴覚的なものであり、もともと中国のように嗅覚的なそれではない。かの『福富草紙』にあっても、二人の爺の名前（福富・秀武）が音読みするとオナラの擬声音になるらしいことは単なる偶然ではあるまい（佐竹昭広「美目は果報の基のこと」『民話の思想（平凡社選書25）』一九七三・九）。ちなみに、『福富草紙』よりはくだるかもしれないが、『放屁合戦絵巻』には高向秀武の娘が登場するのは、〈屁ひり爺〉と〈屁ひり嫁〉とをつなぐヒントを暗示しているかもしれない。かれこれ勘案するなら、「狗耕田（耕田狗）」の e・f を単に「竹伐爺型」と概括することはやや議論の余地も残ろう。とするならば、中国の「狗耕田（耕田狗）」における e・f のような展開と、日本の〈花咲か爺〉における「赤いこん箱（屁ひり爺）」のごとき例外とは、数字的な比率から判断しても、どうやら直接的な関わりはないと判断した方がよいのかもしれない。もちろん、それはあくまで結末についてのみであり、ただちに全体的な構成における両者の没交渉を意味するものではない。それは、朝鮮半島にも〈花咲か爺〉¹¹「狗耕田（耕田狗）」型の昔話が存在するからである。

崔仁鶴「韓日狗耕田譚の比較」（『韓日昔話の比較研究』一九九五・五）によれば、韓国には「兄弟と犬」と称すべき〈花咲か爺〉¹²「狗耕田（耕田狗）」型の昔話が存在し、その大枠は

- 一 犬の出現 (一) 兄弟がいた。
- (二) 弟が墓に行つて犬を得る。
- 二 犬の奇瑞 (三) 商人と賭合いをして、犬のおかげで弟は金持になる。
- 兄がまねるが失敗し犬を殺す。
- (四) 弟が持ち帰り犬を埋めると木がはえ、そのために金持になる。兄がまたも失敗する。

となつてゐる。寡聞にして、韓国のほかの事例を知らないもので、正直まったく想像の域を出ないが、これを見る限り、冒頭が遺産相続ないし祖先祭祀で始まること、途中に犬の働きを博打の対象とするモチーフを含むこと、基本的に植物を燃やして灰とする展開に至らないこと、この三点において日本の〈花咲か爺〉にはより遠く、中国の「狗耕田（耕田狗）」にはより近いと言えよう。「兄弟と犬」と言われるように、やはりあくまで話の中心は「動物の援助」（柳田）なわけである。

ただ同時に、賭博の原因が犬の農耕作業は可能か、という点にあったことは（浙江省 b・韓国 (三)）、「赤いこん箱（屁ひり爺）」¹³④や『枯木花さかせ親仁』挿絵で現われる、農機具を背負った巨大な犬のイメージに明確な痕跡をも刻印しているにちがいない。また、紅白の箱が流れてくる始まり方が、前述のとおり〈桃太郎〉〈瓜子姫〉の一部にも披見できることは、漂着神としての犬が一方で老夫婦の申し子という性格も帯びているわけで、あなたがち中国や韓国の祖霊信仰と無縁とも言えなくなってくるのではあるまいか。そう言えば、『枯木花さかせ親仁』において白で団子を搗く理由も「いぬ（犬）にたむ（手回）けん」ためであった。

結

かなり長くなったので、ここで本稿の概略を手短かにまとめておきたい。

本稿では、山形に伝えられる昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」が、〈花咲か爺〉の話型分析のうえでたいへん重要な意義を持つことについて論じた。

まず、当該昔話の全容を話者の語り口に留意しながら紹介し（第一節）、改めて灰を撒く代わりにオナラをするという結末がいかに類例のないものであるかを確認した（第二節）。続いて、〈屁ひり爺〉の話型が、現代では〈鳥呑み爺〉〈竹伐り爺（竹取り爺）〉に二分割されて、原則的に独立したタイプとは認知されないこと（第三節）、しかし柳田国男にさかのぼれば、〈屁ひり爺〉とは〈竹伐り爺（竹取り爺）〉と同意で、〈鳥呑み爺〉を独立させない代わりに、『竹取物語』『福富草紙』の文学から〈花咲か爺〉の昔話に至る広範な接点を持つ可能性があったこと（第四節）、というそれぞれを説明し、後者の捉え方を再評価した。そのことと関わって、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の終わり方が、少し角度を変えて見ると、山形の〈花咲か爺〉諸話のなかで一種の必然性を有するものであることを論証した（第五節）。次に、柳田もふれた文学史との関連と国際的な拡がりからも述べた。すなわち、早く『燕石雑誌』が『福富草紙』からの影響を認めるから、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の結末は話型〈花咲か爺〉にとって決して近代の派生形ではないらしいこと（第六節）、加うるに、赤本の〈花咲か爺〉物も川での出会いで始まり『福富草紙』のように終わることから、「赤いこん箱（屁ひり爺）」の源流はさらに古く求められそうなこと（第七節）、を指摘した。また、中国や韓国の口承文芸を照らしても、やはり根幹は灰を撒く手前までの話と思われるが、前者における「香屁」へ展開するヴァージョンの存在に鑑み、国際的な伝播にも「赤いこん箱（屁ひり爺）」のような語り方が可能性として充分ありえたことを推測した（第八節）。

本稿の意義は、詮ずるところ、山形県を中心に広く分布する「あやつゝ、にしきつゝ、こかねさらゝ」系の「灰を撒く詞」を持つ〈花咲か爺〉

が、まさに〈屁ひり爺〉的な後半部を具備する昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」の介在で、その謎へひとつ具体的な回答が提示されたということにつきるかもしれない（まず前者が後者に先行することはありえないだろう）。しかしながら、その、いわゆるミッシング・リンクの出現によって、見えてきた問題はきわめて豊穣であったと言わなければならない。

【付記】本稿は、科学研究補助金の基盤研究C「出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する基礎的研究—山形地域史の再構築—」（代表者・岩田浩太郎）に基づく研究会での口頭発表を、大幅に修正のうえ活字化したものです。席上、ご意見をいただいた方々にお礼申しあげます。また、本稿をなすにあたり、現在進行中の山形短期大学民話研究センターによる「民話アーカイブ」を利用させていただきました。かつて武田正先生がガリ版で報告され希覯となった数多くの昔話集が、活字と電子媒体という身近な形で提供し直されつつあることの恩恵ははかりしれません。改めて謝意を表する次第です。

On a Variant of “Hanasaka-Jii (The Old Man Who Made Trees Blossom)” in Yamagata Prefecture: A Narrative Structure Analysis of “A Small Red Box (The Old Man Who Farted)”

KIKUCHI Hitoshi

(Professor, Asian Cultures, Cultural Systems Course)

Yamagata Prefecture has an outstanding number of versions of a popular folktale “Hanasaka-Jii (The Old Man Who Made Trees Blossom),” including those locally known as “Inuko-mukashi (A Story of A Dog)” and “Kuigoko-mukashi (A Story of A Puppy).” Among them, “Akai Konbako (A Small Red Box,” a.k.a. “He-hiri-jii (The Old Man Who Farted)),” told by Yoshino Eguchi, is noteworthy in that the main character, an old man, does not make dead trees blossom but produces a pleasant tune with farting. The alteration from ‘bringing out blossoms’ to ‘farting out music’ in Eguchi’s version is not her whimsical invention, which can be verified by other similar variants attested in Yamagata Prefecture. Incidentally, “Hansaka-jii” has a nationwide alternative story “Gan-tori-jii (The Old Wild Geese Hunter),” which also lacks the event of blooming trees. In this connection, it is interesting to note that, in the narrative literature study, the ‘non-blooming’ versions are often believed to have appeared earlier than the familiar ‘blooming’ versions in terms of narrative structure. This paper aims to develop a narrative structure analysis of “A Small Red Box,” a peculiar variant of an old man farting out music, and discuss its parallelism with several stories in “Otogi-zoshi” and “Kusa-zoushi” (books of illustrated stories in the medieval and Edo periods in Japan) and its interactions with comparable oral narratives in China and Korea.